

第7回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「僕と狐」

東京都 文化女子大学附属杉並高等学校 1年 北山萌夏



賢治のまちから
高校生★童話大賞

優秀賞へ銀の星賞へ

東京都 文化女子大学附属杉並高等学校 一年 北山 萌夏

『僕と狐』

あれ、と僕は思った。珍しいな、と。

夏休みに入って一週間、何回目だろうか、僕こと福田悠はお気に入りの雫屋という駄菓子屋に来ていた。雫屋は、古ーい今にも壊れそうな木造建築のお店で、古ーいレジの前に丸くなって座っているおばあさんはいつも寝ている。盗まれないのかなと心配になるけど、三組一番の情報通の幸太によれば、あのおばあちゃんは実はめちやくちや耳がよく、めちやくちや足が速いらしい。六年生の悪さばかりする健が前、当たりつきアイスを十個程盗んで店を出たら、その瞬間目の前におばあちゃんが満面の笑みで立っていた、って話があるそうだ。

その後、健がどうなったかは、僕はまだあの店に行きたかったから聞くのをよしといた。とにかく、その雫屋はスーパーにはないお菓子があふれ、僕の寂しいお財布でも十分足りるからよく通っていた。けど不思議なのは、僕のような厳しいお財布状況の小学生は沢山いるはずなのに今まで僕以外のお客さんに会った事はないって事だ。

ところが今日は違って、軒先に少年らしい後姿がある。幼稚園の時から通いつめて初めての事だったから、僕は走って店に向かった。

後少しで店に着くという時、突然少年の姿が見えなくなった。慌てて店の中に入ってみるが、いつもと変わらず誰もいない。でもやっぱり違う事が一つあった。

おばあちゃんが起きていた。(僕は密かに雫屋さんと呼んでいる)

「おばあちゃん、今男の子いたよね？」

「悠坊かい？」

「うん。それでね、男の子いたよね？」

「どうだったかねえ？」

「今さっきの事だよ・・・」

「いたかねえ・・・いたような気もするねえ」

「でしょ!? どんな子だった？」

「そうだねえ。まだ若くてねえ・・・狐の・・・」

「狐の？」

僕が期待して待っているというのに、雫さんはうつらうつらとし始め、そしてそのまま寝てしまった・・・がっくし。

僕はお気に入りのサイダー味の^{おおだまあめ}大玉飴を奮発して二個買って店を出た。
勿論^{もちろん}お金はちゃんとレジに置いてきた。

さて今日はどこに行こうか。

僕は一人遊びが得意だ。別に友達がいなくてもいいわけじゃないよ！ じじくさいと言われるかもしれないけど、僕は散歩が特に好きで歩き回るから町の事には結構詳しいはずだ。夏休みに入ってから毎日の様に散歩している。歩いて汗をかくのが何だか楽しいんだ。

今日は神社に行く事を決めた。さっき全力で走ったし神社の木陰に涼みに行こう。

この神社は大きい。参道はとっても長いし境内も広い。普段はひっそりしているけれど、数週間後の夏祭りの時には相当賑わうから今から楽しみなんだ。

僕は一番涼しそうな日陰を見つけて座り込む。これがあるから散歩はやめられない。沢山歩いた後の気持ちいい休憩、僕しか知らないとして置き場所。飴玉を一個口に入れた。

ぼんやりしてしばらく経った時だった。何となく背後に気配を感じて振

り向くとそこには、驚いた事に少年が立っていた。

「いっ……こんにちは」

「やあ」

少年の声は耳に心地良くて朗らかだった。だけど表情が分からない。彼はお面を被^{かぶ}っているからだ。所々に傷のある真つ白なお面。耳もちゃんとあって、少年の茶色い前髪から出ている。前が見えないんじゃないかってくらい細い目、ヒゲの他に額にも赤色の模様。どこからどう見ても狐の顔だ。ちよつとだけ不気味で、そしてとても格好良い。

僕は立ち上がった。僕より少し身長が高くて手足が細い。お面にはかり気をとられていたけど服装も変わっている。紺色の浴衣みたいなやつ。何だっけ……そう、確か甚^{じん}平^{へい}だ。そして僕は気付いた。

「君、雫屋にいたよね」

根拠はないけど妙な確信を持って言った。

「ああ。彼^{あそこ}処^こ、フクダのお気に入り？」

これには本気で驚いた。

「名前……どうして知ってるの？」

「ランドセルに名札^{なふだ}がついているだろう？」

「ああ……って、それ説明になってないよ。俺、今ランドセル持ってないじゃないか」

「夏休み前、ここで階段から飛び降りて遊んでたろう？ その時に見たんだ。

フクダ ユって書いてあったぜ」

あれを見られたのか……。僕は思い出して赤面した。

あれは夏休み直前、そう一学期終業式の日の事で（ちなみに僕は成績はいい）学校帰りに今日の様に雫屋に寄り、神社に涼みに来ていた。それでふと階段全段飛ばしとか水溜り飛び越しとかを無^む性^{じょう}にやりたくなくて、ランドセルをほうり捨て無我夢中でやった。彼が「フクダ ユ」って言った

のは三年の時名札が破れちゃったからだ。とにかくあの時か・
僕が、回想にふけてっていると、少年が声をかけてくる。

「俺にも飴くれよ」

「いいよ」

奮発して二個買ってよかった。

「それにしても、此処こゝが涼ひやしいのよく知ってるな。知ってるのは俺だけだと
思ってたのに」

「うん、偶然みつけた」

「フクダ幸運だな」

「うん、そうかも。ねえ……君は何年生？ 雲雀ひばり小学校の生徒？ 名前は
何なんていうの？」

「俺は学校には行ってないんだ」

「そうなんだ……。それじゃあ俺たちが学校に行ってる時何してるの？」

「特に……何も。人間を観察してる。木の上で寝てる。雲屋をのぞく。そんな
なこと」

「それは……僕もやってみたいな。ね、名前は？」

「……好きなように呼んでくれていいよ」

「それは……困るなあ。うーん」

しばらく考えてからまた尋ねる。

「君、名前ないの？」

「まあそんなところ」

「ふーん」

好きな様に、かあ。狐のお面被ってるし……

「じゃあ狐、狐って呼ぶ」

「いいよ」

「いいんだ」

「何でも良いって言ったの俺だし」

「気に入らない？」

「いや。ぴったりじゃないか。フクダはさ、どうしていつも一人で遊んでるんだ？」

「え、それはほら、一人の方が俺のやりたいように出来るからさ」

「お前・・本当に小五かよ？」

「うん。ってそんな事まで知ってるんだ」

「まあな。フクダさ、健全な人間のガキなら友達と遊ぶ事に楽しさを見出せよな」

狐は呆れた様に言った。お面の下では眉まゆを寄せているに違いない。(眉があつたらだけど) 同い年くらいの狐に偉そうに言われたくないと思っただ、狐の言葉に僕は答える。

「友達と遊ぶのも楽しいけどさ、一人でも平気なんだ」

「まさかフクダ、祭りも一人で来るのか」

「そのつもりだけど」

「つかあー・・寂しいねえ」

「ほっといてよ。狐はお祭りに来ないの？」

「来るよ。俺は毎年必ず来てる。もう、何年も前から・・」

「俺も毎年、何年も来てるよ」

僕が小さい頃からこの月城神社の祭りに何度も来ているという意味を込めて言うと、狐は何故なか少しだけ顔を俯うつむかせて笑った。

「去年までは一人で回ってたけど、狐、今年も来るでしょ？」

「ああ、でも俺は人込みが好きじゃねえから屋台にはいかないぜ」

「ふーん。・・僕は結構好きだけどな」

「いんじゃない」

「じゃあ俺が何か買って持っていくよ。いつも何所どこで祭りを見てたの」

「大抵木の上だけけど・・フクダが来たら彼処に移動しようかな」

狐は振り向くと社を指差した。

社の前は丁度木がより一層鬱蒼と生い茂っていて、参道から見えにくく
なっている。

「OK。そこに行く。狐は何が好き？」

「何でも。何でも食べるよ」

「りょーかい。それにしても木の上でお祭り見るのって楽しそうだね」

僕は想像しながら言った。

「フクダは話があっちこっち飛ぶな」

狐が楽しそうに笑う。

そして歩きだしたかと思うと近くにあった大きめの木にするすると登っ
ていった。あまりの素早い身のこなしに僕は呆気にとられる。

「フクダ、木登りの経験は？」

「幼稚園生の時に何度か。今は無理だよ」

狐は今時の人間は駄目だなあと行ってカラカラと笑った。そして、

「今日はもう晩飯の時間じゃないか？ 明日木登りのコツを教えてやるよ」

「明日？」

「おう。明日も此処に来るだろう？」

「もちろん！」

「じゃ、気を付けて帰んな」

「うん、明日ね」

明日も狐に会えると思うと楽しみで、狐はどこに住んでいるのかと聞く
のを忘れてしまった。ただ帰る前に「俺の名前、福田悠ゆうって言うんだよ。
福田ユじゃないよ」とだけは言っておいた。

それからお祭りまでの数週間、僕は殆ど毎日狐と遊んだ。木登りを教え
てもらったり川で泳いだり、雪屋で雪さんとお喋りしたりコマとかを教え

でもらったり・色々な事を狐に教えてもらった。散歩中に見つけた僕だけの穴場は大抵狐も知っていたし、むしろ狐の方がよっぽど詳しくかった。町内を駆け回って遊んだお陰で僕の肌は真っ赤に焼けている。

日はすっかり落ちて提灯やら電球やらの照明が明るく輝いていた。それなりに風があるけれど人込みからあふれる熱気と屋台からもれる熱気とで十分暑い。

入口最初の屋台は焼きそばだった。晩御飯は五時と決まっている僕のお腹はいい加減腹の虫が煩い。ふらふら〜と足が屋台に行きかけて慌てて思い留まった。主食系は狐と食べるから冷めないよう、奥で買おう。僕は長年の経験から数軒先にあるはずの射的に向かった。

そう言えば僕も浴衣を着てくれば良かった。狐はいつも紺色の甚平を着ていて、それが狐のお面と茶色っぽい髪に異様に似合っていて密かに僕も着てみたいな、なんて思っていた。

それをぼんやり考えながら杏飴の個数をかけてするピンボールの棒を引っ張った。パチンコ玉は勢い良く転がってへ4<のところへ。

う・・四個かあ。流石にもうこれ以上持てないし、そろそろ狐の所に行くこう。

両腕一杯の焼きそばやシャーペンや林檎飴、かき氷など、それに射的の景品の数々を持って僕は人込みをすり抜けながら奥へ進む。

「お待たせ」

「よ、来たな。にしても沢山買ったなあ」

「だろ？」

僕は偶数個になる様に気を付けて持ってきた数々の物を狐に渡していく。狐はお面を少しあげて食べ物を次々と消化していった。

「ユウは絶対、幸運の星の下にいるよな」

「そう？ どうして？」

「だってぴんぼーるとかスロットとか殆ど最高値出しただろ？」

狐のぴんぼーるといふ発音が面白くて笑った僕は、確かに、とうなずく。「小さい頃からそういう運はいいんだ。くじ引きとか、正月のおみくじとかもねえ」

狐は棚に器用に腰掛け、たこ焼きを頬張る。僕はさつきから気になっている事を尋ねた。

「食べにくいならお面を外せばいいのに。何で外さないのさ？」

「これはあれだ、俺のホリデーだ」

「ほりでえ？」

しばらく考え込む僕。

「もしかしてポリシーのこと？」

「・・・それだ」

狐は黙って杏飴に取り掛かる。

夏休み中遊んでいて気が付いたけど、狐にはこういう所が多々ある。片仮名にからきし弱いのだ。町の事やお祖母ちゃんの知恵袋みたいな知識はやたらあるくせに、テレビゲームとかの知識はゼロ。一番記憶に残っているのは、トイレをかわや厠と言った事。最初何の事を言っているのかさっぱり分からなくて困った。

「また変な間違い方したね」

僕が笑いながら言うのと彼は頭をかいた。

「時代が変わるのは本当に早えんだ。追いついたと思ってもすぐに新しい波が来る」

「え？ 何の話？」

狐は祭りの照明でほんやりと明るくなっている空に向けていた視線を僕に向けると、僕の髪をガシガシとかき回した。それは小さい時おじいちゃんにやられたそれと似ていた。

僕も狐も階段の一番上の段で寝転がって、それぞれ錦飴と団扇うちわを片手に満天の星空を眺めていた時だった。

「あれ、誰かと思えば福田じゃん」

名前を呼ばれて身を起こす。草陰から出てきたのはクラスメイトの亮りょういち一だった。

「亮一…」

彼はクラスのやんちゃ組の中でもリーダー的存在で、ちよつと莫迦ばかな所が玉に傷だけど行動力もあるし人に好かれる良い奴だ。学校では割と気の合う特定の人としか話さない僕にも気軽に声をかけてくれる。

「御前ごぜんこんなとこで何してんの？」

言われて僕はちらりと狐を見やる。狐はどういう訳か身動き一つせず亮一を凝視している。何をそんなに固まっているんだろう？

「何って…見ての通り休憩してるんだよ」

「ふーん。相変わらず一人で行動するの好きなのな。祭りに一人で来るなんてやっぱり御前ごぜん変わってるよ」

「え…？」

亮一は楽しそうに笑っている。変わつてると言われる事にはとつくに慣れていたのでから気にならないけど、聞き捨てならない言葉が…

「一人…？」

「おっ、福田一人でそんなに食ったのか？ すげえな。って、それシャーピンじゃん！ 俺まだ食ってねえ！ じゃ、福田！ 俺はシャーピン食いに行かなきゃ。だから、またなーっ！」

「え…ちよ、待っ…！」

亮一は喋しゃべりたいだけ喋るとあつという間に草陰に消えてしまった。一人でっって…っという事だよ？

「狐…」

狐は足を投げ出したまま亮一の去っていった方を見ていたが、僕が戸惑いながら狐を見ている事に気付くと肩を竦めて短く笑った。

「あーあ、とうとうばれちゃったなあー。楽しかったのに、っちえー。残念」
「どういう事・・・？」

狐は何だかあつけらかなとしていているけれど、僕は完全に混乱していた。

「亮一・・・狐の事・・・」

「ああ、見えてなかったな」

あっさりと言いつ切る。

「な、何でっ!? 僕には見えてるのに・・・亮一には見えてなくて・・・狐はそこに居たのに・・・やっぱり見えてなくて・・・何で？」

「それはさ、」

僕はごくりと唾を飲み込んだ。風がふあさーっと吹いて濃い緑の木々がざわざわと怪しげに動く。月明かりを頭上から受けた狐からは人間らしさがこれっぽちも感じられない。ゆっくりと狐は言った。

「俺が、妖狐だから」

風が強く吹く。ざわっと空気が揺らいで祭りの明かりが一瞬消えた。ほんの一秒ちよつとの出来事だったけれど参道の方が少し騒がしくなった。

「よう・・・こ・・・？」

「そう。漢字はこうな」

右手指し指の爪がによつと伸びて地面に「妖狐」と書く狐。

爪が伸びたーっ！ と突っ込む余裕はない。その時僕はどうでも良い質問が思い浮かんで思わず口にしてしまった。

「ちなみに尻尾の数は・・・」

「ん？ 九本だけど」

「ははー。そっかそれは・・・すごいねー」

狐は思考回路が乱れている僕を見て笑う。

「意外と普通だな。もつと気味悪きみわるがられるかと思った」

「驚いちゃいるけど、そんな事はないよ」

「何故」

「だって一緒に沢山遊んできたじゃないか」

それに、と言いかけて僕は気付く。

そうだよ、僕は楽しかったんだ。恐くないと言ったら嘘だけど、妖怪と友達になれるなんて僕ってかなり幸運なんじゃ・・・？

「一つ確認していきないんだけど、・・・狐は悪い奴じゃないんだろ？」

「・・・」

狐は一時黙ったかと思うと、ぶはっと吹き出して笑い出した。

「な、何だよ。何が可笑しいんだよ？」

むっとして言う。僕は真面目なんだ！

「悪い悪い。だってよ、普通本人を目の前にして悪い奴か、とか聞くか？
悪い奴がはいそうです、なんて言わないだろう」

狐はひいひい言いながら腹を抱えている。

「俺を恐がって逃げない人間は初めてだ。弥生婆さんとも御前は面白いと話してたんだ」

「弥生・・・？」

「雫屋の婆さんだよ」

「そうなんだ・・・え、あの人も妖怪なの？」

「そ。弥生は力が強くて人間に見られようとすれば見えるんだ。ユウに俺が見えるのは多分御前に元から少し霊力があるんだだろうな。それに俺が人間に見られようって思ってる所あるし、その辺が絡からんでるんじゃないか」

「ふーん。狐は人間と友達になりたいの」

「・・・かもな。仲間には笑われるけど、俺は人間で結構面白いと思うんだ」

「ふーん・・・ありがとう」

「ん？」

「人間を好きでいてくれて」

狐は頭をかいた。照れているのかな。

「狐が妖狐でもあんまり変わらないよ。むしろ僕にしか狐が見えないなんて何か嬉しい」

先刻から思っている事を正直に言ってみる。

「やっぱり御前は変わってるな」

「よく言われるけど」

「やっぱりな」

「ねえ、何で今年の夏から狐が見えるようになったんだろう？」

「うん、それが不思議だ。年を取ると霊力があがるのか。外見年齢が近いからか。ま、色々条件が揃ったんじゃないか」

「ふーん。ね、今度は妖狐の姿を見せてよ」

「え・・・まあいいけど・・・今度な。今は祭りを楽しもうじゃないか」

「うん！ あ、人込みが嫌いっていうの嘘？」

「まあな」

「よし、じゃ行こう！ 狐みたいな格好良いお面が欲しかったんだ」

「はは！ そうだ、ユウ。無闇むやみに俺に話しかけんなよ！ 独り言に見えちまうからな」

「大丈夫だよ。それに皆自分が楽しむのに忙しくて俺達にかまってる暇ないさ！」

僕と狐は参道にかけていく。

僕達の夏はまだまだ終わらない。